松阪市議会議長

中　森　弘　幸　様　　平成２４年１１月２６日

報告者　松阪市議会議員 前川幸敏

視察報告

今回、下記の通り行政視察を実施致しましたのでその内容等を報告いたします。

記

1、視察の日程　　平成２４年１１月１５日～１６日

２、視察先　　北海道白老町　白老町企画振興部企画政策課
アイヌ民族博物館

３、視察参加者　　前川幸敏

４、視察項目　　松浦武四郎とアイヌ民族について
アイヌ民族国立博物館について
アイヌ民族博物館現地視察

５ 視察内容　　要点のみ記載

以上

概要

松浦武四郎とアイヌ民族について

その昔、この広い北海道は私達の先祖の自由な天地であった。

「アイヌの歴史」

アイヌは日本国に暮らす民族のひとつで、東北地方の北部から北海道、千島列島、樺太(今のサハリン)といった地域に古くから暮らしていました。

明治時代になってから、日本民族が入植をし、隣り合って暮らすようになりました。

そこで、先に暮らしていた人達を先住民族と呼んでいました。

アイヌ民族の土地には、文字を使った記録ができる前から人びとが暮らしていました。

約２万年前の石器、１万年前の人骨が見つかっています。この人骨は現在のアイヌ民族の先祖らしく、この頃までにはアイヌが北海道に来ていたことがわかります。

世界のどの民族でもそうであるように、アイヌの歴史も周りの民族との関わりなかで作られてきました。

樺太から先にはニヴフ、ウイルタ、ウリチ、ナナイ、モンゴル、漢人、満州人といった大陸の民族がいました。千島列島の先にはカムチャツカ半島があり、イテリメンやコリャーク、チュクチが暮らしていたほか、時代が下るとロシア人が入植してきました。もちろん本州の和人とも長い交流の歴史があります。

アイヌは身の周りの環境をよく知り、そこから手に入る魚や海草、動物の肉と皮、ワシの羽根などによって周囲の民族と取引をしていた。また，他の民族を介して中国製品を手に入れそれを本州に売る「仲介交易」と呼ばれる取引でありました。北海道産の魚からつくった肥やしが近畿地方の綿花を育て木綿製品になってアイヌにもたされるなど、お互いの生活に大きな変化を生みだすきっかけになりました。

初期の交易は、お互いに自由に行き来をして、アイヌは船を操って函館や東北地方まで渡り、自由に相手を選んでいた。

やがて、函館付近の和人が勢力を持ち、松前藩となっていく中で交易には多くの制約が課せられました。東北地方へ渡る事も禁じられ、やがて函館にも行く事が禁じられました。

それぞれの地域に和人が出向いて交易を行うようになると決まった相手としか取り引きできなくなり多くの不正が行われました。「アイヌ勘定」やメノコ勘定と言う言葉があります。

アイヌは数を数えることができなかったので「はじめ、1、２・・・１０、終わり」と数えて交易品を騙し取った」と言う笑い話で、アイヌをこっけいに扱った北海道の民間伝承です。明治時代にアイヌ勘定をされた女性の思い出話が残っていますが、実際にはウソとわかっていても睨みをきかせて文句を言わせないのだそうで、とても悔しかったそうです。

この様な事情から、物語に語られるような幸せな交易の時代もやがて終わりを迎えます、

また，中国やロシアと行き来がしやすい地域では和人よりもそちらの民族と親しくした人達もいました。
明治時代になると日本政府はそれまで蝦夷地と呼んでいた地域を，新たに「北海道」と言う名前にして植民政策を始めました。
アイヌは日本国民とされましたが制度の上でも今日まで続くいろいろな不平等があります。
千島列島と樺太はロシアとの間で奪い合いとなり，何度も国境が変わりました。アイヌは国境によって，また領土内の移住によって暮らす場所を変えられ，仕事も言葉も新しいものに変えなければなりませんでした。先祖伝来の暮らしから異民族の名前と言葉を使い，異民族の神に参り異民族の間で暮らす事となりました。
この時代を乗り越えるのは、今の私達には想像もできないほど大変なことだったのでは。
そうした新しい暮らしのなかでも、アイヌの言葉や物語、歌を後生に伝えようと意識して努力をしている人もいると。

北海道の名付け親「松浦武四郎」

松浦武四郎(１８１８～１８８８没)といえば幕末から明治維新にかけて日本史においても激動の時代に生きた人物で、伊勢の国小野江村、現在は松阪市小野江町に生まれ蝦夷の詳細な地図を作成し北海道と地名をつけた探検家であります。
今も旧家は伊勢街道沿いにあり、旧家を眺めていますと昔の武四郎の人物像が思いうかべられる所でもあります。
今でこそ北海道といえば観光の名所であり山海の珍味が楽しんでもらい北の観光地として本土とはちがった土地柄は風情もあり何回ともなく訪れたい北海道ではと思われる。
江戸時代では未開の土地「蝦夷地」と呼ばれ足を踏み入れる人々は僅かだったと言います。
松浦武四郎は伊能忠敬氏等の後輩にあたり先輩方が記した沿岸部の測量結果を使い内陸部の空白地を地図に書き記していったと書かれています。
6 度に渡り蝦夷地を調査、現住民のアイヌ人の人々の協力を得て各地を巡り歩きました。
今ではその資料は松阪市小野江町の松浦武四郎記念館に国の重要文化財として保存をされている。
指定をされたのは蝦夷日誌をはじめ１５０冊以上を数える、１８４５年～５８年の６度の蝦夷地調査記録、アイヌ語で書かれた大型地図・東西蝦夷山川地理取調図・アイヌ文化を紹介する蝦夷漫画のほか、収集した小刀や玉飾りなどアイヌ民族資料も含まれている。
また、記録調査では松前藩がアイヌ民族に課した強制労働や迫害の様子が記され武四郎がアイヌ民族の命を救ってほしいと幕府に訴える記述など北海道の歴史・アイヌ民族の歴史や文化を知る上で武四郎がアイヌ民族とかかわってきた様子がわかる貴重な資料である。

松浦武四郎と白老元陣屋

武四郎と白老元陣屋とは、蝦夷地開発という歴史的命題のもと深い係わりを持っている。
言うまでもなく武四郎は北海道、各群等の名付け親として有名であるばかりでなく、北海

道開発史上忘れる事のできない先駆的業績の輝く人である、明治２年辞官する時開拓判官大主典の要職にあった。
武四郎の半生は６回に及ぶ蝦夷地探検と膨大な蝦夷地関係の著作でもわかるように蝦夷地に光を与える為に精魂を捧げたとある。
この武四郎と白老元陣屋を見込み、やがて自身も御備頭として嗣子五郎を伴って着陣している、三好監物とは盟友の間柄であり共に勤王派で蝦夷開拓を語り合う仲である。
安政 4 年武四郎は白老会所に泊まった。監物は白老に着陣して未だ日が浅く３ケ月が経ったばかりで談論は風発し武四郎は大いに共鳴し賞讃した。

白老元陣屋とは

白老川とその支流ウトカンベツ川に挟まれ丘陵を背にして、仙台藩白老元陣屋がある。安政３年白老へ着いた藩士達は陣屋建設にとりかかり年末には一応の完成をみた。
面積は５．８ヘクタール外曲輪と内曲輪を円形に巡らし本陣・勘定所・兵具庫・米蔵・長屋・稽古場などが配置された。
少し離れた兵陵に仙台から勧請した塩釜神社と愛宕神社を建立した。
安政６年、かねて幕府に願い出ていた領地拝領が許され白老、十勝など６場所が仙台藩領となった、以降、代官も任命されて民政にもあたるようになった。
陣屋には常時１５０名程の士卒が駐屯していた、半年から 1 年間の勤務で大番組などから選ばれたり、藩士の次・三男・足軽が中心となっていた。これらの者には若干の下賜金と扶持米が与えられたが、支度金や道中の費用は個人持ちでした。
配属された火器は火縄銃・大筒３門があり、幸いにして外国船との交戦はなく、これらは旧式の和砲で実戦には役にたたなかったと思われる。
白老は北海道では温暖気候であるが藩士たちにとっては経験したことのない極寒の地であった、加えて新鮮な野菜の補給がままならなかった事もあり病に倒れる者が多く藩では医師を派遣したが、その手当てのかいもなく死亡した者は２０数名を数えた。
数多くの苦労を重ねながら警備にあたっていたが明治元年戊辰戦争がぼっ発し官軍の来攻をしった藩士たちは仙台へ撤退し、１２年間の幕を閉じた。

「民族共生の象徴となる空間」構想について

緑の湖畔に息づくアイヌ文化を次の世代へ
民族共生の象徴となる空間の意義と役割
民族共生の象徴となる空間(象徴空間)は、平成 21 年(２００９)７月に内閣官房長官に提出された「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」報告で、今後のアイヌ政策の「扇の要」となる政策として提言されました。
この、象徴空間は先住民族であるアイヌの尊厳を尊重し、アイヌ文化が直面している課題に対応しつつ我が国が将来に向け多様で豊かな文化や異なる民族との共生を尊重する社会を形成するためのシンボルとなるものです。
象徴空間は緑豊かな北海道白老町のポロト湖畔に整備され、アイヌ文化復興のナショナル

センターとして次のような機能を備えることが期待されます。

[象徴空間の具体的な機能]

展示等機能

＊先住民族としてのアイヌの歴史・文化等の総合的・一体的な展示、実践的な調査研究、伝承者等の人材育成

＊国立を含め、国が主体的に文化施設(博物館等)を整備

体験・交流機能

＊文化伝承・体験学習活動(伝統的家屋・山・海川の活用)

＊国内外の文化との交流(海外の先住民族文化との交流等)

文化施設周辺の公園機能

＊豊かな自然を活用した憩いの場等の提供

アイヌの精神文化を尊重する機能

＊伝統的儀式が行える広場等

＊大学等にあるアイヌ人骨のうち、遺族等への返還の目途が立たないものは国が主導して象徴空間に集約し、尊厳ある慰霊に配慮。

今後の取組・検討課題等

＊博物館に係る基本構想について、平成２５年夏を目途に一定の結論

＊文化伝承・人材育成・体験交流活動等の具体的な取組内容について、有識者や若手を含むアイヌ等の声を聴きつつ、平成２５年夏を目途に一定の結論

＊整備・管理運営手法の在り方等について、平成２５年度中を目途に一定の結論

＊(財)アイヌ民族博物館の人材・知見を象徴空間の管理運営に最大限活用

＊国と関係自治体(白老町)等の連携・協力を強化

＊アイヌ人骨の返還や集約に向けた進め方等について検討促進

アイヌ民族博物館

アイヌ民族博物館(ポロトコタン)は、アイヌの文化遺産を保存公開するために、１９６５年白老市街地にあったアイヌ集落をポロト湖畔に移設・復元した野外博物館です。

５軒のチセ(茅葺きの家)や博物館・植物園・飼育舎などからなり、ポロトコタンの名前で親しまれています。

アイヌ古式舞踊

白老で伝承するアイヌ古式舞踊は、１９８４年国の重要無形文化財に指定されました。儀式で踊られるイオマンテリムセ(熊の霊送りの踊り)やアイヌの楽器ムックリ(口琴)・ウポポ(座り歌)イフンケ(子守歌)・サロルンチカプリムセ(鶴の舞)・雄壮なエムシリムセ(剣の舞)など、北方の大自然を思わせる歌舞が次々と繰り広げられています。

所感

古くからアイヌの人々がコタンをつくり暮らしていた白老町は、アイヌ語の「シラウオイ」を語源として豊かな北の大自然を神として敬いながら独自の民族文化を育んできたアイヌの人々は、漁猟で得た獣皮や海産物などを和人や大陸の諸民族と交易し、この地に鉄製品や漆器・反物などをもたらします。
安政３年江戸幕府はロシア勢力の南下に備えて仙台藩に北方警備を命じ、その中核施設である陣屋を白老町に建設。幕府が終焉を迎えるまで白老町は北方警備の拠点となり、アイヌと和人、双方の歴史と文化を後世に伝えることのできる白老は、民族の歴史の交差点として、また日本のアイヌ文化復興の拠点として全国的に知られている。

白老元陣屋資料館を案内をしていただきました。
仙台藩白老元陣屋資料館友の会
白老町文化財等運営審議会委員の川西政幸さんから説明を受けました。

幕末から明治維新にかけて激動の時代に生きた探検家・松浦武四郎、伊勢の国に生まれ蝦夷の詳細な地図を作成をし「北海道」という地名をつけた。白老においてもアイヌの人々の協力を得て各地を巡り歩き、そしてアイヌの人々の過酷な差別環境を改善するように尽力していたと説明を受けた。
また、陣屋には三好監物氏との交通の記録が残されています。

陣屋内に塩釜神社

安政 3 年に北方警備のため陣屋を築いた仙台藩が勧請した神社です。最北の塩釜社として１４０年余り町の移り変わりを眺めてきた。

この神社は蝦夷地に赴く藩士達は城下を後にする時、地元神社詣で祝詞を授かり道中の安全そして残り行く家族の無事を祈ったと、陣屋の西の小高い丘に御分霊が収まっている。

平成 11 年宮城県奉仕団の参拝を仰ぎ神楽奉納等が町民の見守る中盛大に挙行され８月には緑の資料が初めて津軽海峡を渡り展覧会や講演会が催された。

参道の鳥居脇には文久元年と刻まれた石灯篭があり勤番士が寄進した記念の碑です

「宮柱太しく立てて祈りける照日のおかに君が八千代を」　美好清房

この文面は松浦武四郎「東蝦夷日誌」白老領所収

アイヌ民族「象徴空間」に大きな進展
白老町庁舎にて
企画振興部企画政策課・アイヌ施策推進室・室長 蝦名勝徳様
アイヌ施策推進室・主幹 武永真様

白老町は民族共生の象徴となる空間の整備地に選定され２４年７月「象徴空間」基本構想が決定され、今後アイヌ文化の復興・発展の拠点として国レベルで様々な政策が展開されていくとのこと。一方ではアイヌ文化の普及振興についても町内外で様々な事業が行われていくとのことです。
今回、私を含め 2 名で象徴空間計画の説明を受けました。国内で５番目に北海道白老町に建設される事になります。
我々の大先輩・三雲が生んだ探検家・松浦武四郎翁、三雲町は松阪市と合併をして三雲町と言う名前は消えましたが、三雲町民の心には三雲が生んだ探検家・松浦武四郎と言う言葉は消えません。
武四郎が北海道と名前をつけてから今年は１４３年となります。１４３年目にして武四郎とアイヌ民族の人々の夢が実現されたように思います。
羽田国交相・鳩山元首相が象徴空間整備地を視察・戸田町長・加藤北海道アイヌ協会理事長は「1 日も早く実現に向けて進めてほしい」と要望されたと聞きました。

アイヌ民族博物館を視察

博物館館長・野本正博様のご案内でポロトコタンを視察しました。
ポロト湖畔に面する広大な敷地には、博物館を中心にたくさんの施設があり古式舞踊・トンコリ演奏・伝統料理等々ご案内をしていただきました。
その中でも北海道犬のコーナーがあり、ソフトバンクのＣＭで一躍人気者になった「かい君」は北海道白老出身のアイヌ犬ですとの説明。
我々は、かい君の子供「そら君」に初めて出会いました。そら君もいつの日か、皆さん方の前で親以上に羽ばたくことでしょう。
産まれたばかりの子犬もいました。アイヌ犬ですがそら君とは親戚ということ何でしょうか。？？？

今回の視察で学ばしていただいた事は、生まれて初めて白老町へ行かせていただいた。
２日間、行政関係者・団体の方々・アイヌ民族の方々とかかわっていられる方々・町議会の先生方・町民の方々・たくさんの方々と話をする機会がありました。
話は松浦武四郎です。白老町の方々には、三重県生まれの探検家・武四郎。アイヌ民族の気持ちがわかってくれた武四郎と敬意をいただいております。
これから、国立博物館建設に向けて進んでいきますので、私達・松阪市も協力できる範囲でかかわっていけたらと思います。
白老町の方々も、博物館が完成したら是非来ていただきたいとのお言葉も頂戴しました。
松阪市と白老町が武四郎を通じて、文化交流等々ができるように頑張りたいと思います。

以上